

調査行の危険度

1975年6月21日が兵庫県朝来郡（現・朝来市）生野町市川における第一回オオサンショウウオ生態調査であった。県下の各自治体へのアンケート調査を実施したり、聞き込み調査の結果を受けて生野町の魚ヶ滝を日中に視察した。滝の下流側の平瀬の河原に下りるやいなや、対岸の大岩の下から黒い円い頭が出ていたが、まさかと思いつつ近づくとオオサンショウウオであった。発見者の村上飼育士の名を付けて、以後は村上岩と呼ぶこととした。それから30年ほどが過ぎ、幾多の大水を受けて岩の周囲は干上がった（写真1）。32年目になる今月末で200回近い調査行を重ねることができたが、フィールドワークには当然のことながら危険が常に付きまとうものである。それも専ら夜間の河川内を踏査するものであり、一人での調査行は無謀であるとの批判も受けている。滑りやすい河床や思わぬ深みに注意しつつ遡河しながら、オオサンショウウオの出現に目を光らせて行く。発見すると思わず足元への注意が欠けて水没の憂き目に合うこともある。流れの強さも色々であり雨後の大水には陸上へのエスケープの連続になることもある。

暗闇の谷川を一人歩くのは怖くありませんか？と再々質問される。地元の人、クマが出ることもあるが、養蜂施設が荒らされるのですぐに有害鳥獣駆除の申請が出て処分されるので心配ないと言う。シカの地響きを立てての疾走は迫力満点で、川沿いの竹林で竹の子を探すイノシシが踏み折る枯れ枝の音もあまり良い気分ではない。目の前の藪からガサゴソとタヌキが出てきてお互いにギョッと立ちすくんで睨めっこしたこともあったが、雪上に点々と続く血の跡を撮影していて気付くと足元に猟犬が来ていたのにはゾッとした。犬は鎖に繋いでおくものだと思うのだが、法的にはどうなっているのだろうか？ 猟期が終わるとダメ犬は置き去りにされ野良犬となる。優秀な猟犬は電波発信機を付けているので、深追いしすぎて山向こうまで行ってしまっても飼い主が車でお迎えに行くそうである。でも、やはり最も恐ろしいのはヒトだ。夜の闇の河原で数人がゴソゴソしているのに出くわすことがあり、クワバラクワバラとばかり足早に通りすぎるようにしている。密猟されたイノシシのファミリーの残骸（大きな頭骨が2つと小が3つ、四肢の骨や皮など・写真2）が転がっていたりする。竹の子シーズンには竹藪の中にワイヤーのくくり罠が仕掛けてあったりするので危険だ。心臓の止まるほどビクついたのは、あの有名なモルゲ

ンハートに出くわした最初の時だった。周囲を見回しても何も見えないし、オドロオドロした闇の中から何が飛び出してくるかと心臓に悪いので、もっぱら俯いて川の中だけを見ることにしている。しかし、時に空を仰ぎ見ると星の多さと輝きに圧倒されたり、ホタルのシーズンには感激させられる事もしばしばだが、植林の山に真っ黒な大入道を見つけた時には一瞬だが心臓が止まったようだ。山男たちが新人時代に経験する話として小説で読んでいたものの、己の影による大入道にはやはり驚かされた。

谷川沿いの雪道を下山する時に穴を踏み抜いて前倒し、膝関節がグキッと音を立てた時にはしまったと思ったが、幸いなことに少々の痛みが残っただけで事なきを得た。河底のコケに滑ってガスランプごと水中に沈み闇になった時も、尾てい骨の痛みと共に予備灯の重要なことが身に沁みだ。ノイバラの棘に顔面を撫でられたりマムシに出くわしたりと危険は絶えないが、30年目に於いて初めてやられたのがヤマビルの洗礼(写真3)だった。それまでには見たこともなかったのに、2004年の調査では毎回血を吸われた。地元の人達も増えたシカが落ちていくと言っており、畑仕事にも気が抜けないとこぼしていた。

今までの最大の危機は、昨年暮れの大雪後の調査であった。ハンザキ研から上流の流れは9つのヘアピンカーブが連続し、秋口の調査では3.5^{km}程で22個体を測定したが、22時~06時と8時間ものハードな踏査だった。クリスマスイブの夜に積雪70^{cm}の谷川に2度目の調査に入ったが、出現が無く難行ともなり途中で上陸することにした。疲れと寒さも重なり曲がりくねった流れに方向を誤り左岸側に登らねばならぬ所を、右岸へ上がったのである。秋には藪が急峻な壁を覆っていたが、積雪で登りやすく見えたので30分ほど雪山登山を試みたが、一向に国道へ出ることができなかった。やむなく自分の足跡をたどり下山したが、途中で足跡が分からなくなり川に下りた場所は10^mほどの誤差が出来ていた。あとは流れのままにベースへたどり着いたのだが、あのまま雪山の中で遭難死していたら捜索の皆様大変なご苦労や迷惑を掛けてしまうところだった。その夜に、私が川のどこへ調査に入ったかを知る人はいなかったからである。それが、山中で凍死していたら行方不明ということにもなっていたかもしれない。本人は好き好んでのことで本望であってもできるだけ迷惑をかけないことを考えねばならないと大いに反省した。今後は、研究所入口に“SOS”カードを出しておき(写真4)、最後のご迷惑ではありますが地域の方々への協力をお願いすることとしたいと考えているところです。

老人会への入会のお誘いも頂いた年齢になりましたが、いましばらくはフィールドに専念したい思いが強く、健康管理にも責任を感じるところがあります。最近心臓が時々ストライキを起こし始めており、緊急薬を手放せない状況でドクターストップを掛けられそうになっています。暖房された研究所内の20℃からいきなり-10℃の河原へ出ることは、30℃ものギャップがあって危険だと止められました。冬眠してくれないオオサンショウウオに付き合うにはやむおえぬことです。それでも間もなく春の訪れと共に彼らの最も活動するシーズンが来ます。また一年、もう一年と頑張ってきた道です。今年もまた。

ハンザキ研日誌 2006年1月～3月

1月14-15日：融雪洪水を実感するための調査。前日からのショボ降る雨の中を現地へ向かう。本流は泥濁りの大水で調査は不可能。すぐ目の前の猪ノ子谷も増水しているが、水は澄んでいる。本流が人間の活動の影響を受けて泥流となるのだが、合流点では明らかな水色の差が見られる。夜、救急車のサイレンが響く。重病人が出たのかと心配したが、凍結した雪に滑って腕を骨折した由を後に聞く。15日は教室の一つで研究室の本棚や机、ロッカーなどの配置を検討する。

産経新聞・豊岡支局記者取材に来所。 (栃本 一名)

2月27日- : 工科専門学校での非常勤講師が休みになったので、さあ行くぞと思っ

3月1日 たが月の半分しか休み？がなく、それも飛び飛びで調査に行けない。

ようやく、姫路市立水族館のメンバーと月末に出掛けることができた。多くのハンザキ・グッズのコレクションと共に皆に笑われながら、ワープロも運んでもらい作文をする態勢も整えた。グッズ類は趣味の範囲かもしれないが、一般の人々にはオオサンショウウオに対する親近感を抱かせる目的もあり、置く場所にも困り、見ていただきたい気持ちもあっての展示公開を考えていこうとしている。

調査の方は28日の夜間のみ実施し、3個体発見したが流れが早く2個体の確保測定に終わり、共に再捕個体であった。昼間に水源の一つである猪ノ子谷の下流部を踏査したが残り雪に人の足跡が続き猟師かと考え(今年の猟期末?)引き返した。有害だと駆除されてはかなわない。

3月2日 : 兵庫県いなみ野学園高齢者大学講座講義「オオサンショウウオと環境」

6日 : 出石川・緊急保護オオサンショウウオ第三回健康診断(349個体)

10日 : 岡山県真庭市「環境と共生したまちづくり“オオサンショウウオ”フォーラム」(約70名)はんざきセンター視察。

19-21日 : またまた1か月が過ぎてしまいそうで、吹雪の中を向かう。5個体測定し、新規登録1個体(No.953)

25日- : NPO法人の倉庫に保管中の段ボール箱約50と賃貸ガレージから25箱の資

4月1日 料をハンザキ研へ搬入。29日は日高町十戸のクリーン作戦にてレク、30日は第三回黒川地域協議会開催。初めて水源①の山水の受水槽の清掃をしたが、なかなか味わい深そうな源水であった。

調査の方は7泊8日で、1夜2個体のみでNo.954・955と登録する。

7夜中3夜は雪で、3晩は疲労で入川せず。昼間は搬入物の整理と生活改善活動で手足が浮腫んでしまいハードな月末だった。

生野ダム直下の河川工事

オオサンショウウオの調査は主に生野ダムの上流で実施してきたが、2001年からは生野町中心部の小野大橋（このおおはし）の餌付け群を比較のため測定してきた。毎年8月に啓発活動も兼ねて、漁礁内の全個体を取り上げて健康診断と個体登録を行っている。ここは、町の観光協会が禁漁区を設定しニシキゴイを放してその隠れ家として60センチのU字溝を6個伏せ、大きな石で抑えてある漁礁が作られている。地域の人達がコイに残飯を投げ与えていたら、いつの間にかオオサンショウウオが出てきて魚のアラなどを横取りして食べてしまうようになったという。この1か所だけで30個体を越える登録があるが、意外にも定住性が認められなかった。地域の観察者からは、8月下旬から姿が見えなくなるのは、捕まえて測定したりする影響だとクレームもあったが、丁度産卵期にさしかかっていた移動が行われた結果だと考えている。

この位置から数百メートル上流には竹藪の岸辺やネコヤナギの続く河岸があり、良さそうな産卵場所を構成しているように見える。しかし、この付近は右岸側から地滑りが進んでいることや、道路が狭いこともあり改善工事が始められた。小野大橋群からもこの位置への移動が確認されており、本格的な工事が行われるまでに生息個体数調査や産卵場所の確保、工事中の緊急避難場所など対策を考えていかねばならないだろう。今後の同様な事例が多々あることを考えると「兵庫県立オオサンショウウオ保護センター」の設立は啓発施設としても意義のあるものになるでしょう（当ニュースNo.1 参照）。

ハンザキ・グッズ・コレクション

1)兵庫県

- ①朝来市生野町 [銀谷工房Tel:079-679-4448]: コースター（布製・陶製）キーホルダー（布製）タイピン（銀製）ネックレス（トンボ玉・銀製）箸置き（陶製）
ガラス細工
- ② 同 [黒川自然公園センター]: ティーシャツ・コースター（布製）
- ③養父市 [建屋・三谷地域づくり研究会]: 置物（陶製）キーホルダー（布製）
ティシャツ・ウインドブレーカー・うちわ・手拭い・クッキー・お焼き・曆、グッズではないが橋柱・マンホール蓋・護岸のレプリカ
- ④ 同 [八鹿土木事務所]: 建屋川竣工記念マス・建屋川テレカ
- ⑤篠山市 [1996シンポジウム記念]: ティーシャツ・クリヤーファイル
- ⑥姫路市 [市立水族館]: 棗（金属製・紙製）皿（陶製）入館券（紙製）マグカップ（陶製）テレカ（栃本定年記念）
- ⑦佐用町 [佐用オオサンショウウオの会]: ポチ袋
- ⑧豊岡市 [日本モンゴル民族博物館]: 土鈴
[豊岡土木事務所]: 木製キーホルダー・安全工事プレート・のぼり旗
- ⑨その他 : 景品のレプリカ・ネクタイピン・箸置き・・・・・・・・・・・・・・・・

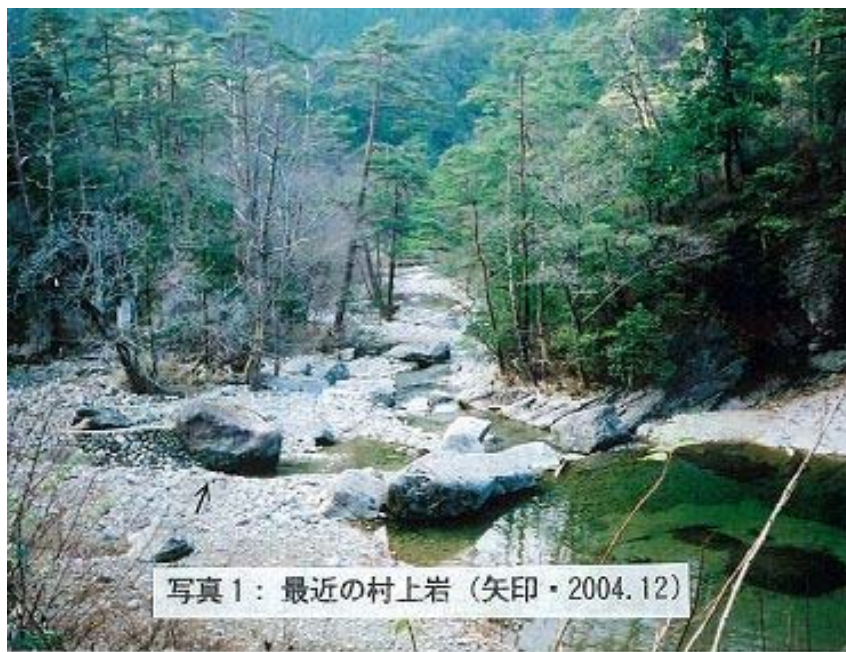


写真1：最近の村上岩（矢印・2004.12）



写真4：SOSカード



写真2：狩猟期間外の河原に散乱するイノシシ・ファミリーの骨



写真5：魚のアラに反応して漁礁からゾロゾロと



写真3：ヤマビルとなかなか止まらない出血



写真6：公開展示準備中のグッズ類